広げよう英語科の輪（福井市）

福井市美山中学校　英語科

足羽川の清流に沿う本校は、豊田三郎画伯が愛した美山杉（足羽杉）に囲まれた、美しい自然の中にあります。純朴で素直な生徒７１名とともに、英語科教員１名、ＡＬＴ１名で、楽しく英語の学習をしています。

（左から）　奥田、Victoria

●メンバー紹介　　①授業で大切にしていること　　②好きなこと

奥　田　小百合

①生徒の活動場面を多く取り入れること。何より楽しい授業。
②海外ドラマを見ること。ドライブ。

Vitoria Stanley

① I think it is important to have English classes with lots of activities and chances to communicate. I also want students to have fun and enjoy speaking English.
② I like watching many things on Metflix and YouTube. I also like going to cafes with friends

福井市越廼中学校　英語科

越廼中学校は、全校生徒１０名程の小規模校です。海産物販売、海フェスタ、水仙配布など、越廼地区の自然や海の恵みを活かした独自の行事が盛りだくさんです。また、本校２階にあるサロンからの眺めは最高なので、出張などで来られた際は、是非サロンにお立ち寄りください！

（左から）　礒部、Seymour

●メンバー紹介　①授業で大切にしていること　②好きなもの・こと

礒　部　智　子

①笑顔、教師と生徒・生徒同士のやりとりの量を増やすこと

② Snoopy (●) ´ `･)

Seymour Chriserria

① The most important thing is for the students become comfortable speaking English while having fun.

② I love spicy food, pink, and dogs.

福井市清水中学校　英語科

清水中学校英語科です。本校はJTE ３名とALT １名の計４名です。お互いに授業のアイデアを共有しながら授業づくりに励んでいます。

（左から）西岡、井上、Chriserria、高嶋

●メンバー紹介　①好きなこと・もの　② 2023 年の目標　③座右の銘

高　嶋　成　美

①お笑い番組鑑賞　②イライラせずに過ごす　③めんどくさいは人生最大の敵

井　上　紫　帆

①バドミントン　②周りの人を大切にする　③一期一会

西　岡　拓　朗

①ラケットスポーツ　② No といえる日本人になる　③おかれた場所でさきなさい

Chriserria

① Kimono, traveling, Netflix　② I want students to speak English with a smile.
③ Mistakes lead to success.

福井市社中学校　英語科

こんにちは。私たち社中学校英語科は、教員４名＋ALT １名で楽しく英語の授業を行っています。社中学校の英語科の特徴は、協力体制が充実しているところです。業務や授業づくりに困ったときには、アドバイスをし合ったり、授業を参観し合ったりしています。今後も教員個々の授業力向上のために、協力しながら授業づくりをしていきたいと思います。

（左から）　萬匠　洸智　　山本　悠生　　Alison Watanabe　　広瀬　真由美

●メンバー紹介　　①好きなもの・こと　　②授業で大切にしていること

広　瀬　真由美

①テニス・ランニング　　②全員が参加できること、楽しくやれること

山　本　悠　生

①温泉でゆっくり疲れをとること　　②大きな声で授業をすること

萬　匠　洸　智

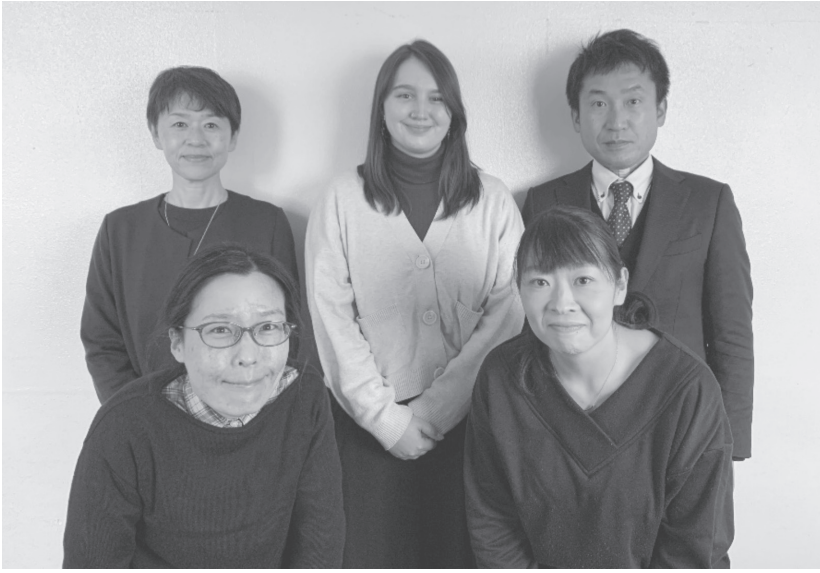
①スニーカー集め、ランニングでリフレッシュすること　　②笑顔で楽しく授業をすること

Alison Watanabe

① I like to go café hopping.

② I think it’s important that students communicate and not be afraid of making mistakes

福井市足羽第一中学校　英語科



（後列　左から）谷口恵美　　Victoria Stanley　　松田洋佳
（前列　左から）坂下奈緒子　　森田尚子

Victoria 先生に足羽一中英語科を紹介していただきました。

Asuwa-1 thinks cooperation, communication, and enjoying learning are the most important. You can see this in our English classes. Our English teachers are friendly, kind, and create a positive learning environment for students. Our classes have a fun atmosphere focused on communication so students can enjoy learning English. More importantly, we made a supportive environment, so students aren't afraid to speak English even if they make mistakes. Together, we model natural communication and teamwork, and support students' English learning.

福井市杉坂中学校　英語科

令和３年度に開校した杉坂中学校です。四方を杉林に囲まれ、四季折々の動植物に触れることができる自然豊かな場所です。アットホームな雰囲気の中、生徒とともに学習や様々な体験をしながら過ごしています。

Isaak　　山口

●メンバー紹介　①私のリラックス方法　②いつかチャレンジしてみたいこと

山　口　麻　美

①落ち着いたカフェで、本を読んだり、ぼーっとすること
②空中ヨガ（凝り固まった体を伸ばしたいです）

Isaak Lehew

① I like to play games that transport me to another world, where I can progress at a relaxing pace.
② I want to try raising my own child.

高志中学校　英語科

こんにちは、高志中学校英語科です！私たちは福井県内様々な地域から通う個性あふれる生徒達から元気をもらいつつ、グローバルに活躍するリーダーの育成に尽力しています。

（左から）　阪本、Nate、松田、野崎、James

●メンバー紹介　（アルファベット＆五十音順、敬称略）①授業で心がけていること　②座右の銘

James Floyd

① You can't force someone to enjoy learning a language. You need to create the environment for it through fun and positive reinforcement, not make it a chore.

② Use it or lose it. (when it comes to English)

Nathaniel Teocson

① I want everyone to feel comfortable and confident when using English.

② Real failure is when you stop trying.

阪　本　浩　平

①最大限、英語を使うこと。　② Life is too short.

野　﨑　恵　美

①生徒一人一人が自己表現や発話しやすいトピックや場面の設定を心がけています。

② It's Up to You です。座右の銘というか、意味も響きも好きな英語です。

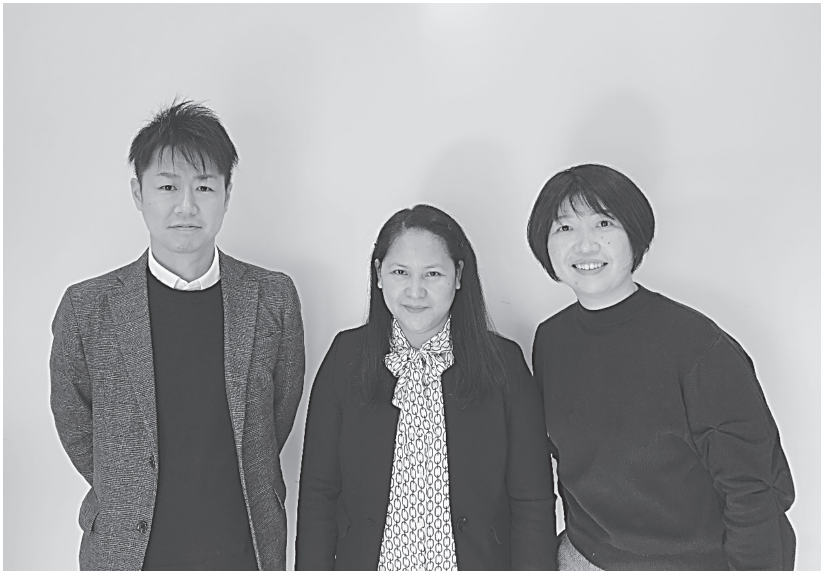
松　田　美亜子

①明るく楽しく、生徒の脳みそが active になるように。

②教育とは学校で学んだことを一切忘れた後に、なお残っているものである（アインシュタイン）

福井大学教育学部附属義務教育学校 後期課程 英語科

こんにちは。わたしたちの学校は、1年生から9年生までの子どもたちが通う義務教育学校です。そのため、前期課程と後期課程の教員が交流し、小学校高学年のクラスを担当することもあります。子どもたちが英語を用いて世界とつながっていけるように、わたしたち教師も楽しみながら協働探究していきたいと思います。



写真は左から、河合創、Florabel Omandam Matsukawa、兼井智加

●メンバー紹介　①好きなもの・こと　② 行ってみたい国とそこでしたいこと
③座右の銘（英語で）

兼　井　智　加

①カレー　②イタリア　地中海の美味しいものを堪能したい！
③ There is always light behind the clouds.「雲の向こうは いつも青空」

河　合　創

①秋吉純けい　②ドイツ　ビールとソーセージに溺れたい　③ I'm always hungry.

松　本　潤　子

① sketching　② Holland（オランダ）　③ Where there is a will, there is a way.

Florabel Omandam Matsukawa

① Catching up with friends　② Israel, the holy land
③ While there is life, there is hope

BOOKSHELF Vol. 9

私のお薦めの一冊

山並　陞一　著
語源でわかった！　英単語記憶術
2003 年／文春新書／ 253pp. ／ 946 円／ ISBN 978-4166602964

会　長　**浅井　裕規**（鯖江高校）

英語を聞いたり、英単語を覚えたりすることに大きな困難があるいう問題を、どうすれば乗り越えることができるのか、というのがこの本の主題です。著者の提案はただ一つ、「語源に戻れ」です。

take を例に取ってみましょう。take の語源は印欧語の deg（デグ）で、例えば葡萄の房に「触れて選び、つかんで持って行く」動作を deg と発音しました。その後、deg が teg（テグ）、tek（テク）になり、古英語の tak（タク）を経て、take（テイク）に落ち着きました。よって、take の原義は、「触れて選び、つかみ取る」となります。忘れてはならないのは、take は「選ぶために触る」という意味合いを持っていることです。また、teg はラテン語では tag（タグ）になり、ギリシャ語では tech（テク）になりました。tag（付け札）、contagious（接触伝染の）、integral（触れ傷がない、完全な）などの英語には、tag や teg が「触れる」という含みを持って埋め込まれています。また、tact（そのことに触れると直ちにひらめく機転）、contact（接触）、tax（品物に触れて決める税）などの英語は、take の語源で理解できます。

このように、語源である印欧語の deg を響かせる原音のテクやタクを耳にしたとき、原義の「触れて選び、つかみ取る」から来るイメージが浮かぶようになれば、英語学習の負担は軽くなるというのです。

他にも have を例に取ると、語源は印欧語の kap（カップ）で、野生動物を捕獲するときの「頭をつかむ」動作を意味する言葉でした。kap は cap（頭にかぶる帽子）や capture（つかまえる）等として、今でも生き残っています。この kap は cap や hap、そして hab になり、have に落ち着きました。つまり、kap（つかむ）から生まれた have は、「つかむ、つかんでいる」という意味を本来持っているのです。

読み書きはもとより、話す英語への近道は「語源に戻れ」が、この本の主張です。しかも、たった 100 語程度の語源を覚えれば、日常的に必要な英単語の 8 割を系統的に把握できるとしています。単語の語源の勉強になるだけでなく、人類の進化と共に言語が歩んできた長い歴史に触れることによって、これまで何気なく接してきた単語一つ一つに対する見方も変わってくるのではないでしょうか。

三島　多聞　著
生きる力を求めて　Give Me the Power to Live － 中村久子の世界

2011 年／東本願寺出版部／ 207pp. ／ 1200 円／ ISBN978-48341-0433-2

副会長　**尾形　俊弘**（越前市万葉中学校）

（『知ってるつもり ?! 中村久子（日本テレビ）』で放映された番組を、以前は YouTube 等で見ることができましたが､現在は削除されているようです。上記の書物は日本語で執筆されていますが、英訳も同時に載っているので、英語学習に活用できるかもしれません。）

日本のヘレンケラー、中村久子。
二人が出会った時、ヘレンは涙を流しながらつぶやいた。
「私より不幸な人。そして、私より偉大な人―。」

３才になった久子に、不幸が次々と襲いかかる。
病のために両手両足を切断。
大好きだった父との死別、母の再婚、失明の危機。

母は、久子と無理心中を図ろうとさえする。

絶望の日々は続く。

身売り同然で見世物小屋へ。
母との死別、三度の結婚、夫と死別や離婚、三女との死別。

自分の不幸を恨む久子―
そんな久子がある書物に出会う。
そして、あれだけ嫌だった見世物小屋に戻る決心をする。
彼女に何が起きたのか―

久子が遺した衝撃の言葉。
彼女のメッセージをあなたは決して忘れることはないだろう。

「人生に絶望なし　　如何なる人生にも 決して絶望はない」

井上　一馬　著
音読王　心にきざむ英語の名文

2002 年／小学館／ 223pp. ／絶版／ ISBN 978-4093105224

放送テスト部部長　**栗田　由紀枝**（森田中学校）

この本にはいろいろなジャンルの英語の名文が抜粋されて掲載されています。有名なスピーチではキング牧師、リンカーン、から映画「独裁者」の中のチャップリンが演じた役柄のスピーチなど。小説では「Animal Farm」、「The Great Gatsby」から「The Tale of Peter Rabbit」「Alice Adventures in Wonderland」「Uncle Tom's Cabin」、詩や民謡など。もちろんシェークスピアの戯曲に国家や早口言葉。さらには津田梅子、新渡戸稲造など日本人が書いた英語の名文など様々な分野の英文を少しずつ楽しむことができます。また、英文の訳とも書かれているので、読みながら訳に自信がない部分もすぐに確認することができます。さらにはその英文の解説も載せられているので、好奇心も満たされます。

英語の初心者でも音読は必要な練習法だが、経年の英語学習者としても音読を楽しむことができる一冊です。この原稿を書くにあたり、改めて英文を聞き、音読をしてみましたが、それぞれの英文の話されている場面を想像して、国民の前で音読するイメージで読んでみたり、物語の舞台をイメージして意識して読んでみたりと楽しむことができました。また、以前、この本を用いて、キング牧師の「I have a dream.」のスピーチを授業で扱ったりもしました。

あまりにも有名な英文ばかりなのでしょうが、私はそれほど多く英文を読んできていないので、どれもが新鮮に感じました。

瀧沢広人・渡部正実　著
指導のアイデア満載！英語授業のタブレット活用

2022 年／学陽書房／ 160pp. ／ 2090 円／ ISBN 978-4313654501

広報部副部長　**織田昌宏**（大野高校）

GIGA スクール構想、コロナによる一斉休校により、学校における ICT 化が一気に進みました。一人１台タブレット端末が配付され、google classroom やロイロノートを使う機会が増えてきました。私自身、これまで ICT とは無縁の生活を送ってきましたが、校務分掌の中で ICT 担当となり、いろいろな仕事が降ってくるようになりました。これを機会にさまざまな研修に参加し、少しずつではありますが、ICT 機器を使えるようになってきました。

さて、先生方は授業でどのくらい ICT を活用されていますか。英文をプロジェクターで投影し、説明を書き込んでいく。これで十分活用されていると思います。また、指導者用デジタル教科書を使って授業をする。これもものすごく便利です。好きなところから音声を流すことができたり、関連資料が画像でまとめられていたりします。（事務から、英語科は他教科に比べてお金使いすぎですと言われそうですが笑）

以上が私がタブレット端末が配付される前に取り組んでいた主な ICT 活用なのですが、少しずつ活用の幅も広がりつつあったなかで、もっと何かできることがないかと思っていた時に手に取ったのがこの本でした。「タブレットを使ってできる〇〇指導」という形で各章が構成されており、授業での活用例が豊富に掲載されています。対象学年や、必要な時間などが書かれており、そのまま真似して授業でやってみたいと思えるものが多いです。中には、「そのアプリ、県だとダウンロードできないのですが…」というものもあります。でも、別のソフトやアプリを使えば同じようなことができるものもあります。参考になるアイデアをこの中で得て、アレンジしていけばきっと授業が変わります。

生徒の様子を見ていると、「音読したものを録音して提出しなさい」というものであっても、生徒はタブレットに向かって音読し、聞きなおしたり、読み間違えると録音しなおしたり、読めないところを友達に教えてもらったり、と前向きに意欲的に取り組む姿が見られます。ICT 機器を用いることで、生徒の主体的に学ぶ態度も育成されるのではないでしょうか。

ここ数年で ICT 環境は整いました。あとはどう活用していくかです。もちろん、ICT を用いて授業をすれば成績が伸びるわけではありません。そんなもの使わなくても成績を伸ばしたり、生徒が興味を持ち授業に取り組むようにさせたりすることができなければ、ICT を使ったところで結果は同じです。自分自身の指導力も磨きながら、ICT を上手く活用し指導効果を高めていく。時代の変化に取り残されないように、できるところから始めていきましょう。私ももっともっと頑張ります！

佐々木　裕子　著
実践型クリティカルシンキング

2022 年／ディスカヴァー・トゥエンティワン／ 200pp. ／ 1540 円／ ISBN 978-4799328620

研究部副部長　**村　昭信**（三国高校）

最近、校務では英語の指導というよりもっぱら探究活動の仕事がメインになっていて、英語関係の書籍を購入して読む機会が減ってきているのが現状である。そんな中で、今回紹介するのは佐々木裕子著の『実践型クリティカルシンキング』です。実際、英語とは直接関係のない書籍ですが、英語教育でもリーディングの指導でクリティカルシンキングしながら批判的に読むことで内容を深く理解していく手法があり、自分でも実際どういう風に考えて読むことがクリティカルシンキングにあたるのか明確ではなかったので、興味を持ち購入した。

筆者は経営人材育成に携わる方なので、内容的には企業での課題を解決する上でどのように思考していくべきかを説いており、具体的なテーマを取り上げ、それについて授業形式で展開している。（なので、英語教育でいうところの「クリティカルシンキング」とは違っていました。）ただ、英語教育、日々の授業、授業中での活動どれをとっても目指す目的・目標があるはずなので、それらを考える上で非常に有用な示唆を与えてくれている。

いちばん紹介したい部分は、クリティカルシンキングの３つのステップである。「目指すものを定義する」「何が問題なのかクリアにする」「打ち手を考える」ということである。目指すものは何かについては、いつまでに、どのくらいのレベルまで持っていくのか考え、文言一つ一つの定義をきちんと行い、曖昧にしないことである。そして、現状と目指す姿とのギャップを考えることで問題（課題）がクリアになり、どうすればそのギャップを埋められるかが打ち手を考えることになる。その際の考え方として「ズームイン」と「ズームアウト」がある。ズームインとは細かく砕いて核心に迫る力であり、ズームアウトとは思考や発想の枠を広げる力である。それらを鍛えるためには「なぜ？本当に？具体的には？」という問いを続けていくことが必要で、そうすることで思考が深まり、広がっていくことになるそうだ。

コラム的な部分に書かれていたことも印象に残っていて、日本人は問題・課題解決となったときに手段を先に考える傾向にある。なので後になって「なんでこれをやるの？」「何が先に待っているの？」というパターンに陥ってしまう。「目的」をしっかりと共有し、「何が問題か」明確にして、それに合った手段を考えていかないといけない。言われてみると当たり前だが、学校現場で、そういう思考を持って動いていないことが多い。

このように、この本には学校教育でも応用が利く思考方法がいろいろ提示されている。英語教育のみならず、課題探究学習でも役立つ部分が多く、課題設定―資料収集―分析―まとめといった探究のサイクルの中で、深く思考するためにはどういうことがポイントとなるのかこの本は教えてくれる。この先、生徒たちは正解がない問題・課題に対して最適解を見つけていくことが求められる社会で生きていくことになる。そのためにも、この本で言う「クリティカルシンキング」を身につけるトレーニングが必要ではないかと思う。

広報部　**稲葉　芳明**（大野高校）

江利川　春雄　著
英語教育論争史

2022 年／講談社／ 293pp. ／ 2035 円／ ISBN: 978-4065293270

「たいへんな労力をかけた割には、使えるまでにならない。それが英語だ。

なのに、なぜ中学・高校で英語が必修なのか。この報われないエネルギーを他教科の勉強にまわせば、日本人の学力はもっと向上するのではないか。せめて選択科目にして、本気で英語をやりたい人にだけ集中特訓をすればよいではないか。

こんな疑問を抱いた日本人は戦前からたくさんいた」

「はじめに」でこう記すのは、和歌山大学名誉教授・江利川（えりかわ）春雄氏である。江利川氏は、これまで『日本人は英語をどう学んできたか』『英語教科書は〈戦争〉をどう教えてきたか』等、英語教育学・英語教育史の優れた著作を多数上梓してこられた。本書もその系譜に連なるもので、明治期から現在に至る一世紀以上にわたる英語教育論争を総括し、歴史に学びながら、英語教育を超えて、今後の日本のありようを示唆する内容になっている。

小学校での英語教育は明治時代に既に導入されており、爾来、西洋を文明のお手本とする欧化主義（これは太平洋戦争後に米化主義に替わる）路線と、日本のアイデンティティを重視する国粋主義路線にぶれる時期が交互に来ていた。しかし、近年は、教育より寧ろ政治経済の影響下で“グローバル人材育成”が強く提唱されている、と著者は喝破する。時系列に沿って、英語教育の目的や手法といった本質的議論と、その背後にある時代の趨勢と社会のニーズを、きちんと区分しながら分析し考察していく。

訳読か会話か、教養か実用か、全員に必修か一部生徒の選択か等々、著者は６つの重要な「論争」の歴史を丹念に辿っていく。書籍や雑誌に遺された言説を逐一掘り起こして引用し、具体的な統計・数値を列挙し、議論を整理して提示していくことで、英語教育を巡る「論争史」の事実を再現し、実証的に事実に語らせていく筆致は実に説得力がある。

ちなみに本書にはこんな一節が引かれている。「語学の教授というものは、当面の言語文章を理解し得るというだけではよい教師にはなれないということが判った。せっかくアメリカの大学で学んで来られた先生でも、たとえ英語英文学に対する学識は持って居られたとしても、自国の言葉で名文を書く様な力を持って居られないので、解釈がぴたりと相手に来ない」。こう語るのは、昭和初期に英語科廃止の急先鋒であった藤村作（ふじむら　つくる）であるが、この藤村を五高生時代に敬服させた新任の英語教師とは、一体誰であったか？答えは、p. 122-123 を参照していただきたい。

佐藤　良明　著
英文法を哲学する
2022 年／アルク／ 239pp. ／ 1980 円／ ISBN: 978-4757439399

佐藤良明氏は東大教養学部で英語教育改革を主導し、放送大学では「ビートルズ de 英文法」を担当し、近年はピンチョンやディランの翻訳を手掛け、英語界のスーパースターとして遍く知られている。そんな佐藤氏が「英文法を哲学」した本書は、従来の英語観を一変させる斬新で革新的パラダイムを提示し、極めて刺激的な英文法理論が開陳されている画期的な“英文法書”である。

佐藤氏はまず英語教育の変遷を辿り、英語の仕組みを理解した上でそこに「乗っかる」ための方法を解説していく。例えば、「五文型」の代わりに《DO の空間》《BE の空間》という２つのパターンで考えることを提唱する。また、従来は 12 種類と教授されてきた時制パターンを、「２つの時制」「３つの時相」という観点で捉えるべきと主張する。

具体的には、まず第１章で「直説法」による叙実という“真実のモード”を解説し、そこから「仮想法」と法助動詞について考察を展開していく。

第２章～第４章では、５文型を詳細に検証していく。著者は、「日本の教育現場で「５文型」が重宝されるのは、英単語の列を前に途方に暮れる生徒たちに、「てにをは」をあてがい、それを足掛かりにする理解するすべを与えてくれるからではないか」(p.122) と、その有用性を認めたうえで、より感覚的に英語の世界を掴み取るために《DO の空間》《BE の空間》という２種類の〈結びつきのパターン〉を提唱する（p.125-126)。ゲーテ、ベイトソン、チョムスキー、はてはフォークナーまで繰り出して展開する構文論は本書の白眉で、こんなに大胆で、刺激的で、しかも平易な言葉で語られる英語論は、終ぞお目にかかったことが無い。

そして第５章では、「時制（テンス)」と「時相（アスペクト)」の領域に踏み込み、「分詞」が《DO の空間》《BE の空間》とどうリンクしていくのかを考察していく。

内容をかいつまんで御紹介したが、至る所で炸裂する佐藤理論は圧巻で、ほんの少しだけさわりを御紹介すると …。

- 川端『雪国』とサイデンステッカー英訳版を対照すると、日本語は対人言語で英語は空間言語であることが分かる（pp.84 ～ 88)。
- 「be は am / are / is の原形で、意味に変わりはない」のではなく、「現在形」とは「今現在」ではなく「時に縛られない」形である（pp.113 ～ 115)。
- 補語を付ける be 動詞は、品詞に関わらず何でも補語にしてしまうところが脱構造的なすごさであり、その緩さが潤滑剤として働いている（pp.148 ～ 149)。

等々、筆者は本書を読みながら時には目から鱗がぼろぼろ落ち続け、時には余りに大胆で革新的な理論に唖然呆然とし、時には主張が難解過ぎて牛の歩みの如く繰り返し繰り返し反芻した。

様々な英文法書の帙の紐を解いてきた先生方は、自分が学んできた英文法体系を再考察したくなるであろうこと必至の挑発的書物として、強くお勧めする。

倉林　秀男　著
英文解釈のテオリア 英文法で迫る英文読解入門

2021 年／Z 会／ 223pp. ／ 1650 円／ ISBN: 978-4865314472

言語構造が大きく異なる英語に対して先人たちが培ってきた叡智“英文解釈の技法”をフルに活用し、英文を読むための基礎力を伸長しようというのが本書の意図である――。というと、“これまで履いて捨てるほど出されてきた英文解釈書と、一体どこが違うのだ？”と、即ツッコミが入りそうだが、英文法の知識をフル活用してヘミングウェイやワイルドの作品を読み解く／味わう学習書を世に出して、洛陽の紙価を高めた倉林氏の新著である。凡百の類似書とは似て非なる、オーセンティックな一冊であることをまず強調しておきたい。

倉林氏はメイン読者を高校生と想定して執筆しているが、敢えて網羅的に全ての文法項目を盛り込もうとはせず、類書と比べ７割程度に絞り込んでいる。その上で〈英文法で迫る〉というコーナーで、個々の文法の機能や意味が、実際の英文にどのように用いられているかを丁寧に解説していく。例えば、第４文型と第３文型の意味の違いを解説する項目では、*The Catcher in the Rye* に言及した英文を素材にする。そこから［T］he novel’s hero Holden Caulfield buys his sister Phoebe a ticket to the carousel in the park and watches her ride it. という一節を引き、“下線部を Holden Caulfield buys a ticket to the carousel in the park for his sister Phoebe と書き換えた場合、意味の違いは生じますか？”と問う。そして〈英文法で迫る〉で――４文型⇔３文型の機械的書き換えにしか触れない参考書では絶対お目にかかれない――秀逸な分析を施すのである（第１章 pp.22-23）。

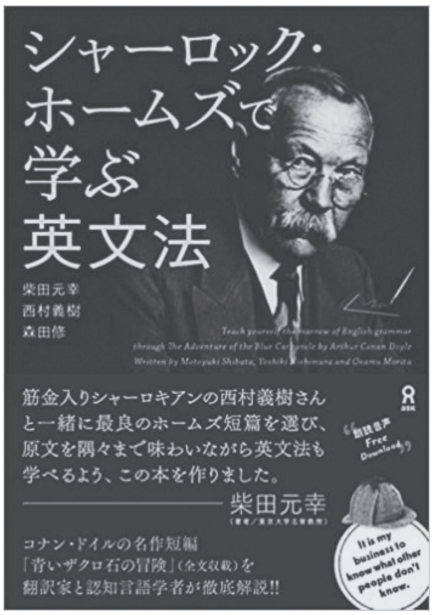
このように、英語教員の立場からすると、自分が習得してきた英文解釈の知識・技術を生徒に提示する際どのような形で為すべきか、つまり教えるためのツール・見取り図を与えてくれる書物として大変有益である。

筆者がこの書を読んで欣喜雀躍した理由はもう一つある――それは、文法項目を導入する「素材」が、絶妙のセンスで選ばれていることだ。例えば、受動態の章で“be 動詞＋過去分詞”と“get ＋過去分詞”の意味の相違を明らかにする際、スティーブ・ジョブズのかの有名なスピーチ（2005 年６月 12 日、スタンフォード大学卒業式で行ったもの）の一節を引き、“…and I had just turned 30. And then I got fired. の下線部を I was fired. とした場合、意味の違いはありますか？”と問うてくる（第６章　pp.112-113）。

文法説明の素材となっている英文は、小説、SNS、著名人のスピーチ、入試問題、果てはオンライン書店返品ポリシーまでも俎上に載せていて、正に百花繚乱である。もう一つだけ例を挙げると、try to do と try doing の意味の違いを説明するため、*Alice’s Adventures in Wonderland* から ‘And she tried to fancy what the flame of a candle is like after the candle is blown out.’ という一節を引いてきたのには唸った（第 28 章 pp.130-133）。優れた英語教師たるもの、まずは自分に豊富な例文のストックが備わっていることが必須肝要なのだと、つくづく思い知らされた。

柴田元幸　西村義樹　森田修　著
シャーロック・ホームズで学ぶ英文法

2022 年／アスク出版／ 310pp. ／ 2200 円／ ISBN: 978-4866394589



本書腰巻で、著者の一人柴田元幸はこう述べる：「筋金入りシャーロキアンの西村義樹さんと一緒に最良のホームズ短編を選び、原文を隅々まで味わいながら英文法も学べるよう、この本を作りました」。

“ホームズの作品を原書で読む！何て魅力的なお誘いなんだ。でも独力で読むには敷居が高すぎないか？とは言えこの誘惑には抗しがたく、適切なサポートが得られるなら一度試してみたいものだが…”と逡巡する英語学習者にとって、本書は福音の書である――「最良のホームズ短編」を細部にわたって舐めるように味わいながら、きちんと英文法の学習・復習が出来るのだから。かつて学校で習った文法事項が、無味乾燥な解説や陳腐極まりない例文から解き放たれ、ホームズ譚のドキドキワクワクする展開の中で、生き生きと鮮やかに立ち上がってくる。そう、これは物語を味わいながら英文法を学ぶ、一粒で二度おいしい（喩えが古い！）ハイブリッド英語学習書なのである。

認知言語学者にして筋金入りのシャーロキアン西村義樹、アスク出版で『ヘミングウェイで学ぶ英文法』等を手掛けた森田修、そして当代随一の名翻訳家柴田元幸による最強のトリオが、“The Adventure of the Blue Carbuncle” を文法・読解・翻訳の三観点から詳細な解説を施していく（翻訳は、柴田氏が主宰・編集する雑誌『MONKEY vol.20 探偵の一ダース』に掲載した新訳に、さらに修正を加えている）。

「ここに気をつけて読もう」を主に担当した森田氏は、痒い所に手が届く懇切丁寧な解説を提示し、日頃は見過ごしがちな古い言い回し（表現）もちゃんとカヴァーする。例えば、‘How came the stone into the goose, …’ という一文を引き合いに出して、〈How come ＋ SV〉の古い用法に遡って解説する（pp.269-270）。あるいは、‘… I felt the stone pass along its gullet and down into its crop.’ という一節から、〈feel ＋目的語＋原形〉と〈feel ＋目的語＋現在分詞〉のニュアンスの違いを鮮やかに示す（pp.277-278）。引用文の多彩さには目を見張らされるが、一つだけ例を挙げると、There is [are] … という存在文が文末に分詞や不定詞を伴うことがあるとして、何と ‘There’s a riot going on.’ を引いてきたのには参った（Sly & The Family Stone が 1971 年にリリースした名盤『暴動』の原題）。

本書宣伝惹句には ‘It is my business to know what other people don’t know.’ という一文が記されているが、これについては西村氏が「ワンポイント文法講義③」で、動作動詞と状態動詞の違いについて語法研究的立場からたっぷり蘊蓄を傾けている。

「会報」第 80 号で、北村一真著『英文解体新書２　シャーロック・ホームズから始める英文解釈』を御紹介したが、本書と併せて読めば、ホームズの世界により深く浸り、理解でき、味わえること疑いなし。

柴田　元幸　編・訳・註
英文精読教室　第５巻 怪奇に浸る
2022 年／研究社／ 274pp. ／ 2420 円／ ISBN: 978-4327099053
英文精読教室　第６巻 ユーモアを味わう
2022 年／研究社／ 274pp. ／ 2420 円／ ISBN: 978-4327099060

2021 年４月に刊行が始まった『英文精読教室』全６巻が無事完結した（第１巻は『会報』第 80 号で既紹介）。本シリーズは、柴田氏がこれまで読んだり訳したりしてきた中でとりわけ面白かった短編小説を選び､詳しい註･解説を施したものである｡「物語を楽しむ」「他人になってみる」「口語を聴く」「性差を考える」「怪奇に浸る」「ユーモアを味わう」と、各巻はひとつのテーマに沿って作品が並べているが､今回は最終配本の第５巻と第６巻を御紹介する。

第５巻で一番知名度が高いのは、ポー「赤死病の仮面」。恥かしながら筆者は原文で読むのは初めてだが、予想通り読み通すのは難行苦行だった。絢爛たる比喩が随所に散りばめられて頭がクラクラし、凝りに凝った文体で息の長いワンセンテンスが綴られていくので文構造が見抜きにくく、しかも 19 世紀の古風な言い回しで語られていくのである。とてもじゃないが、注釈無しでは読みきれない難物で、一つ一つの単語・成句・物語背景に、手取り足取り注釈解説を施してくれることに幸甚多謝。変な譬えだが、日頃ラノベしか読んだことない人がいきなり鏡花の「高野聖」に接したら、これは本当に日本語なのかと目が点になるだろう、それに似たカルチャーショックを受けた。

ちなみに第５巻は、古典的名作から 21 世紀の新作まで新旧取り混ぜてセレクトされている。ヴァージニア・ウルフとエリザベス・ボウエンはモノクロスタンダードで描かれたゴシック・スリラー、ポーとアンジェラ・カーターはオールセット、テクニカラーによる人工美、ブライアン・エヴンソンはデジタル・ハンディカメラによる一篇、という感じで筆者は「怪奇に浸」った（しかし、ウルフは超難解！）。

一方第６巻は「ユーモアを味わう」のが趣旨だが、まあ柴田氏が選ぶのだからフツーのものは出てこない。

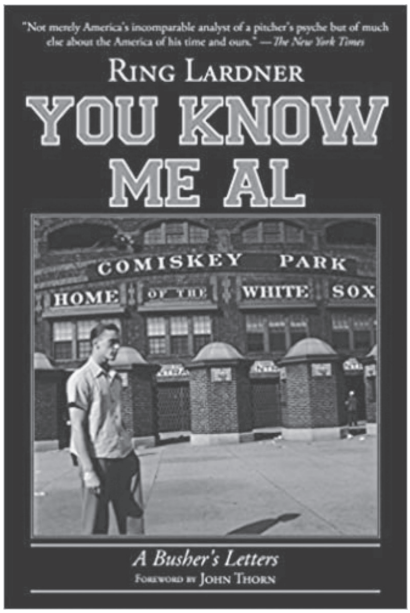
ジャガイモ小説のスタイルで人類創生から世界の歴史を語るケン・スミス「イモ掘りの日々」、およびタイムスリップを素材としたジャック・ネイプス「スピットドッグを開放せよ」は、言葉遊びによるユーモアが中心なので、かなりシンドイ。個人的にはサローヤン「心が高地にある男」のほのぼのと長閑な味わいや、フィニイ「盗まれた街」を言語学的に換骨奪胎したフィリップ・K・ディック「目はそれを持っている」の妄想暴走の可笑しさが、気楽に楽しめた。

Take Me Out to the Ball Game in English

広報部　**稲葉　芳明**（大野高校）

1st Inning

Ring Lardner
You Know Me Al (1916)
Sports Publishing ／ 208pp. ／ $14.95 ／ ISBN: 978-1613216934



Terre Haute, Indiana, September 6

Friend Al: Well, Al old pal I suppose you seen in the paper where I been sold to the White Sox. Believe me Al it comes as a surprise to me and I bet it did to all you good old pals down home. You could of knocked me over with a feather when the old man come up to me and says Jack I've sold you to the Chicago Americans.

新聞記者としてスポーツや巷の話題をコラム欄で取り上げて人気を博し、後にはユーモラスな短編が高く評価されたリング・ラードナー（1885-1933）のデビュー作で、スポーツ（野球）小説の嚆矢というべき古典的名作。

主人公は、ジャック・キーフという架空の投手。彼は自意識過剰で鼻持ちならぬ男だが、かの打撃王タイ・カッブを始め錚々たる大打者と対決したり、名投手と投げ合ったりしているので、単なる大法螺吹き口先だけの投手ではない。ホワイトソックスに入団した 1912 年 9 月から 2 年間、ジャックはインディアナ州ベッドフォードに住む旧友アル (Al) に手紙を送り続け、そのアルへの手紙のみで本書は構成されている（ちなみに、アルからの返信は一切登場しないのがミソ）。

そこから浮かび上がってくる主人公像は、自惚れ屋で見栄っ張りで負け惜しみが強く嫉妬深く大食漢で大酒飲みのデブ男。ジャック本人はそういう短所を全く自覚していないが、その一方人が良くて騙され易いお人好しで、彼を取り巻く人々（中でも女性たち）にいいようにあしらわれる。

ラードナーの後年の作品では苦みや鋭い風刺が混じってくるが、本書は底抜けの滑稽さと野放図な明るさが、何といっても魅力である。ビルドゥングスロマンのパロディとも言うべきこの物語を、ラードナーは米口語特有の自由闊達な喋り言葉・訛を駆使して、登場人物を鮮やかに活写する。例えば、主人公はホームランを食らった時でも、“Crawford got the luckiest three-base hit I ever see. He popped one way up in the air and the wind blowed it against the fence. The wind is something fierce here Al. At that Collins ought to of got under it.” と嘯くのである。

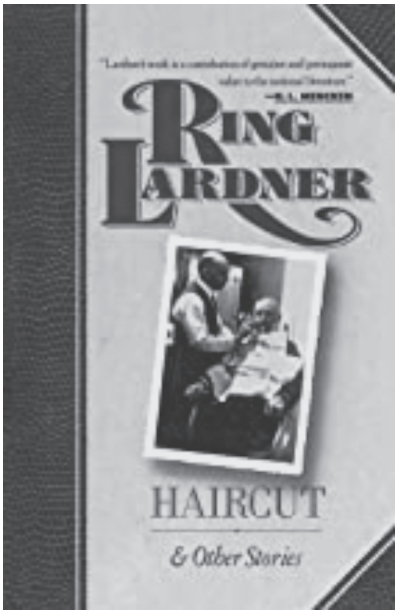
この語り口は、ポール・バニヤンもののトールテールやマーク・トウェインの米国ユーモア小説の正統的後継者とも呼ぶべきもので、個人的には落語の語り口とも相通ずるラードナーならではの至芸名人芸だと思っている。

2nd Inning

Ring Lardner

Alibi Ike (1916)

HAIRCUT & Other Stories ／ Touchstone ／ 192pp. ／ $14.95 ／ ISBN: 978-0020223443



His right name was Frank X. Farrell, and I guess the X stood for “Excuse me.” Because he never pulled a play, good or bad, on or off the field, without apologizin’ it.

“Alibi Ike” was the name Carey wished on him the first day he reported down South. O’course we all cut out the “Alibi” part of it right away for the fear he would overhear it and bust somebody. But we called him “Ike” right to his face and the rest of it was understood by everybody on the club except Ike himself.

リング・ラードナーは処女長編 *You Know Me Al* で一躍人気作家に躍り出た後、野球物を書くユーモア作家として全米に読者を獲得した。その作品の多くは野球選手が一人称で語る短編形式で書かれており、中でも “Alibi Ike”, “Hurry Kane”, “Harmony”, “My Roomy”, “Horseshoes” といった作品が際立った傑作である。野球好きに限らず、アメリカ的ユーモアを愛する方々には強くお勧めしたい逸品ばかりだが、この中からもし一篇だけ挙げるとしたら、やはり “Alibi Ike” になるだろう。

本篇は , *You Know Me Al* 刊行直後に「サタデー・イヴニング・ポスト」誌に掲載された。一般大衆はこの作品を熱烈に歓迎し、Alibi Ike という言葉は、「絶えず癖のように言い訳をしたり、自分の行動を弁護したりする人」の意味で俗語辞典に採用されるまでに至った。主人公は、素晴らしい野球センスに恵まれているにも関わらず、ファインプレーを見せてもエラーをしても弁解をせずにはいられない奇癖の持ち主。言わば、*You Know Me Al* の主人公ジャック・キーフを裏返しにしたような人物で、このアイクの行動をチームメートの一人が生き生きと語っていく。口語を駆使したラードナーならではの語り口にのせて、アメリカ野球版八つぁん熊さんと称したくなるような、抱腹絶倒の物語が展開することと相成る。

私事で恐縮だが、筆者がまだ大学生の頃、加島祥造氏の翻訳によるラードナー短編集『アリバイ・アイク』（新潮文庫、1978 年）を読んで彼の熱烈なファンとなり、爾来 40 年以上にわたり折に触れて幾度となく読み返している。読者諸氏もこの傑作短編を糸口として、かのヴァージニア・ウルフも激賞したリング・ラードナーの世界に、是非一度足を踏み入れていただきたい。

3rd Inning

Bernard Malamud

The Natural (1952)

Farrar, Straus and Giroux ／ 231pp. ／ $16.00 ／ ISBN: 978-0374502003

The ball shot through Toomey's astounded legs and began to climb. The second baseman, laying back on the grass on a hunch, stabbed high for it but it leaped over his straining fingers, sailed through the light and up into the dark, like a white star seeking an old constellation.

Toomey, shrunk to a pygmy, stared into the vast sky.

Roy circled the bases like a Mississippi steamboat, lights lit, flags fluttering, whistle banging, coming round the bend.

The Assistant（1957），*The Magic Barrel*（1958），*The Fixer*（1966）等で、後に 20 世紀米文学史に確たる地位を築くことになるバーナード・マラマッドが、1952 年に発表した処女長編が本作である。

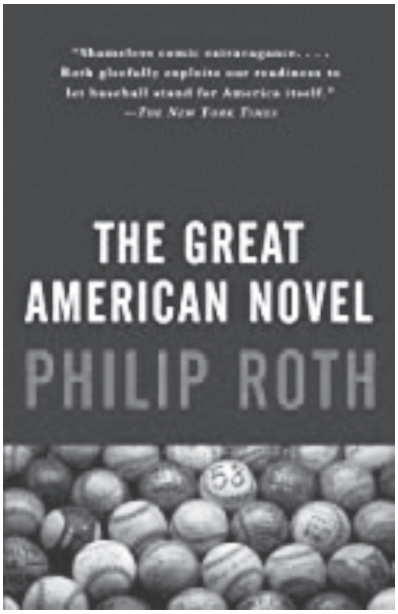
マラマッドというと、社会的弱者への共感をほろ苦いユーモアとペーソスで描く作風がすぐ想起されるが、本書が描く物語はそういうマラマッド的世界と全く異なる。主人公は、超人的な野球の才能を賦与されたロイ・ハブズ。彼は野球界の頂点を目指すものの、残酷な運命にいいように翻弄される。彼の行路に現れる三人の女性のうち二人は彼を残酷に裏切り、ミダス王のように自分の才能に見合った黄金を求めたロイは、イカロスが失墜するが如く悲劇的最後を遂げてしまう。輝く未来を得んとするも、悪の誘惑に抗しきれず破滅する主人公像は、Theodore Dreiser *An American Tragedy* を彷彿させる。

全体として野球の華やかさや開放感よりも陰惨な雰囲気のほうが勝っており、観客の行動なども相当グロテスクに誇張されて描かれているので、リアリズムではなく寓意性の高い物語 (fable) として読み解くべきだろう。陰鬱さが基調の物語の中で、ロイが超人的活躍を見せる場面は――一陣の風のように――その寓意性が文字通りアメリカン・ドリームに昇華して煌めいていて、本書の大きな魅力となっている。

ちなみに本書は、バリー・レヴィンソン監督、ロバート・レッドフォード主演で映画化され、演技・演出・撮影（キャレブ・デシャネル！）の三拍子揃った傑作に仕上がっている。筆者は、封切２日目（1984 年８月 25 日）に満員の日比谷・みゆき座で観て大感激したものだが、映画鑑賞後に原作を読んで、物語の骨格は同じでも展開がまるで異なるのに驚いた。“読んでから観るか、観てから読むか”ではないが、原作と映画を比較分析してみるのも一興かもしれない。

4th Inning

Philip Roth
The Great American Novel (1973)
Vintage ／ 400pp. ／ $16.95 ／ ISBN: 978-0679749066



"Now, Roland, now do you remember what it is that links in brotherhood millions upon millions of American men, makes kin of competitors, makes neighbors of strangers, makes friends of enemies, if only while the game is going on? *Baseball!* And that is how they propose to destroy America, young man, that is their evil and ingenious plan—*to destroy our national game!*"

フィリップ・ロスが 1973 年に発表した本書は、『集英社版　世界の文学』全 38 巻の一冊（邦題『素晴らしいアメリカ野球』）として 1976 年に翻訳刊行されたが、長らく絶版で入手不可能だった。伝説のこの大作怪作問題作が、新潮文庫 "村上柴田翻訳堂" シリーズの一環として 2016 年に蘇った時に筆者は欣喜雀躍して即刻入手し、ようやく御目文字が叶った。

内容はというと、*Portnoy's Complaint* (1969) のような偏執狂的にしつこくくどく粘液質的な語り口で、後の *The Plot Against America* (2004) の先駆けとも言える歴史改変法螺話を構築した長編小説。アメリカ野球が素材とはいえ、マラマッド『ナチュラル』やキンセラ『シューレス・ジョー』のような神話性やロマンティシズムは欠片すら見当たらず、全篇ブラックジョークをふんだんにまぶした壮大でけたたましい法螺話が延々と展開する。

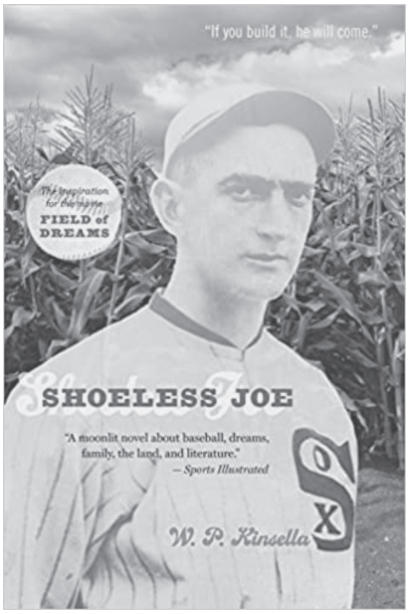
第二次大戦中、メジャー・リーグにはアメリカンとナショナルの二つのリーグに加え「愛国リーグ」と云う第三のリーグが存在したという設定で、「愛国リーグ」に所属する球団の一つマンディーズを中心にして物語は展開する。かなり大部な物語が、ちょっと類のないしつこさ、粘液的くどさ、アナーキーな哄笑を炸裂させて展開するので、読み通すには読者にもそれなりの覚悟と根気と時間と体力が求められる。

じゃあ、詰まらないのかというと、これがとんでもなく破天荒な面白さに満ちている。最初の（"Call me Smitty." と Herman Merville *Moby Dick* のパロディで始まる）'Prologue' を英語で読み直すのは難行苦行苛烈な拷問に近いのが玉に瑕だが、この難所を乗り切れば —— どうにも耐えられなくなったら、あきらめてすっ飛ばしてもいい —— その後は、フィリップ・ロス流現代版トール・テールがハチャメチャに展開していくのを楽しめる。

1973 年といえば、ウォーターゲート事件で米国が大きく揺れ動いていた正にその時期である。野球を素材にして、アメリカの理念と夢をかくも逆説的に笑い飛ばしたロスの力技にひたすら圧倒される凄い小説である。

5th Inning

W. P. Kinsella
Shoeless Joe (1982)
Mariner ／ 265pp. ／ $15.99 ／ ISBN: 978-0395957738



I swear the stars have moved in close enough to eavesdrop as I sit in this single rickety bleacher that I built with my unskilled hands, looking down at Shoeless Joe Jackson. A breath of clover travels on the summer wind. Behind me, just yards away, brook water plashes softly in the darkness, a frog shrills, fireflies dazzle the night like red pepper. A petal falls.

"God what an outfield," he says. "What a left field." He looks up at me and I look down at him. "This must be heaven," he says.

"No. It's Iowa," I reply automatically.

ケヴィン・コスナー主演の映画『フィールド・オブ・ドリームス』の原作 —— 本書に関する説明は。その一言で充分だろう。

シカゴ・ホワイトソックスでプレーし、史上最高の左翼手として称揚されながらも、ワールド・シリーズ八百長事件（ブラックソックス事件）に連座して、球界永久追放となった Shoeless Joe ことジョゼフ・ジョー・ジャクソン。

ある日、"If you build it, he will come." という天の声を耳にした主人公レイが、半信半疑で自分のトウモロコシ畑に野球場を作ると、八百長事件で追放された（シューレス・ジョーを含む）８人の選手が蘇る。その後もレイは天の声の命ずるまま、ある時は隠遁生活を送る作家 J.D. サリンジャーを誘拐しに行ったり、わずか一試合に出場した無名の（実在する）大リーガーに会いに行く ——。

本書は野球の素晴らしさと醍醐味を熱っぽく語る野球賛歌小説であり、と同時に、アメリカ人にとって野球が象徴する 'field of innocence' —— 人間が抱く純粋な夢の美しさ、慈愛の心、無垢なる精神 —— をじっくりと描いていく。加えて、SF ファンタジーの要素が散りばめられて愉快な夢を見させてくれるし、過ぎ去った青春を回顧する人間ドラマでもありと、様々な読み方／楽しみ方が可能であろう。筆者は、アイオワの広々としたトウモロコシ畑や野球選手の白いユニホームが鮮やかに立ち上がってくる、繊細で瑞々しい文体による語り口にとりわけ大きな感銘を受けた。

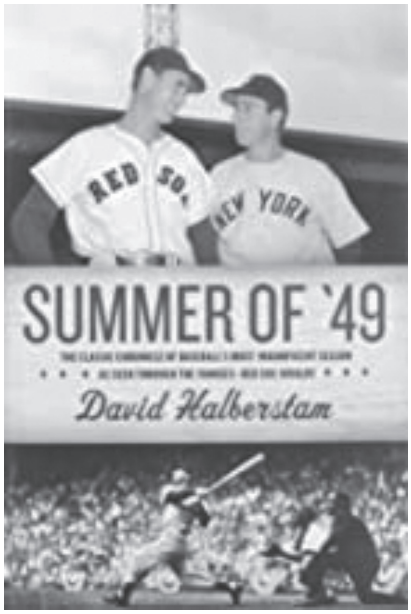
映画版はサリンジャーを架空の作家に変更しているが、それを除けばほぼ忠実に原作を踏襲している。原作も映画も両方傑作と云う稀有な成功を果たした大人の為の寓話を、未読・未見の人は是非体験していただきたい。ちなみに冒頭に引用した部分は映画でも挿入され、"Is this heaven?" "No, it's Iwoa." という遣り取りは、米映画史上屈指の名台詞となっている。

6th Inning

David Halberstam

Summer of '49 (1989)

Harper Perennial ／ 343pp. ／ $14.95 ／ ISBN: 978-0060884260



In the years immediately following World War II, professional baseball mesmerized the American people as it never had before and never would again. Baseball, more than almost anything else, seemed to symbolize normalcy and a return to life in America as it had been before Pearl Harbor.

1948 年、アメリカン・リーグ優勝をかけてクリーブランド・インディアンスと激闘を続けていたボストン・レッドソックスは、プレイオフで敗退した。翌 1949 年、今年こそ雪辱を果たすべく、レッドソックスは、宿敵ニューヨーク・ヤンキースと熾烈な戦いを続けている。シーズン当初の不調を挽回し、残り 2 試合で 1 勝すればペナント優勝というところまでこぎ着け、敵地ヤンキー・スタジアムに乗り込んでいく …。

ニュー・ジャーナリズムの旗手ハルバースタムが、大リーグを素材にした本を出す。ヴェトナム戦争報道でピュリッツァー賞を受賞し、*The Best and the Brightest* でアメリカがヴェトナム戦争の泥沼に入り込んだ経緯を圧倒的臨場感とスケールで描き切ったあのハルバースタムが、1949 年のアメリカン・リーグのペナントレースを描くと云うのだ。刊行当時、多くの読者は驚きと期待が相半ばしていた。

1949 年当時、ハルバースタムは 15 歳。ヤンキースとレッドソックスのペナント争いに夢中になり、ヤンキー・スタジアムにも何度も足を運んだそうだ。そんな彼が 40 年以上経って上梓した本書は、ニュー・ジャーナリズムの手法で書かれたスポーツ・ノンフィクションの傑作であり、パックス・アメリカーナを享受していた頃のアメリカの姿を克明に再現している。

ジョー・ディマジオ、テッド・ウィリアムスを筆頭とする両チームのプレイヤー達は勿論のこと、チームの監督とオーナー、メディア（新聞記者、ラジオアナウンサー、テレビ局）から、選手が行き着けのレストラン、選手のエージェント、一般のファンまで、野球を巡る一大パノラマを余すことなく描いていく。無論、レッドソックス vs. ヤンキース戦の迫力・臨場感の凄さは言わずもがなで、文字を追っているだけなのに、恰もマルチカメラを駆使して、クロースアップとロングショットをシームレスに組み合わせた映像が眼前に再現されているような興奮を味わうことが出来る。

個々のプレーをミクロの視線で微細に分析しながら、それと同時に戦後アメリカにおける野球の意義と影響力をマクロの視点で概観する —— あのハルバースタムをもってして初めて可能になった力わざ（tour de force）である。

7th Inning

Robert Whiting

You Gotta Have Wa (1989)

Vintage ／ 416pp. ／ $18.00 ／ ISBN: 978-0307455970

If you asked a Japanese manager what he considers the most important ingredient of a winning team, he would likely answer *wa*. If you asked him how to knock a team's *wa* awry, he would probably say, "Hire an American."

Foreign ballplayers, most of them refugees from the American major leagues, have been an active part of Japanese baseball since the postwar era

ロバート・ホワイティングは *The Chrysanthemum and the Bat* (1977) で一躍注目を集め、その後も野球をはじめとする各種スポーツを取材対象として、日米両国の雑誌・新聞でコラムやレポートを数多く執筆してきた日本在住のジャーナリストである。*The Chrysanthemum and the Bat* 以来約十年ぶりの新作となり、刊行当時日本でも大きな話題を呼んだ。

1987 年 4 月 27 日、当時の日本プロ野球史上最高年棒でヤクルト・スワローズと契約したボブ・ホーナーが、成田空港に到着した時の大騒動から本書は始まる。そこから日本で野球が根付いていく歴史、ガイジン選手、応援団、通訳、讀賣巨人軍、江川と落合、堤義明（ライオンズ･オーナー)、高校野球と、ありとあらゆる角度から日本社会における「野球」を照射し、その存在と意義と日本社会との関りを多角的に分析していく。

凡百のスポーツ・ジャーナリズムを優に超える俯瞰的視点、日米の歴史を遡りつつ「野球」と 'Baseball' の共通点・相違点を日米比較文化論の視点で論じていく的確な分析、様々な事件やエピソードを縦横無尽に散りばめながら対象に切り込んでいく迫真性とダイナミズム —— これらが一体となり、無類に面白い一巻に仕上がっているのは、著者の筆力の為せる業である。

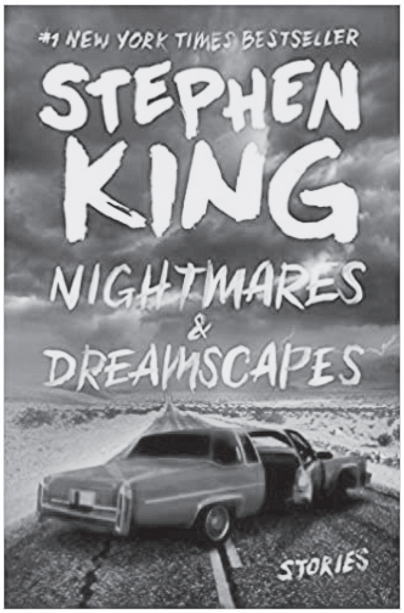
本書が刊行された 1990 年代末は、日米貿易摩擦がピークに達しつつあった時期である。このような状況を背景にして、日本とアメリカの間に生じていた亀裂と摩擦を、「野球」を通して解析・描写しているので、時代の生き証人としての価値も大きい。巧まざるユーモアを散りばめながら、また、著者の個人的見解を一方的に押しつけることをせず、豊富な資料を自在に駆使して事実に歴史的真実を語らせているので、説得力は比類なく知的興趣に富む一冊である。

8th Inning

Stephen King

Head Down（1993）

Nightmares & Dreamscapes ／ Scribner ／ 965pp. ／ $19.99 ／ ISBN: 978-1501192036



"They played together," Dave repeats. "They practiced together, day after day, and that's probably even more important than the games. Now they're going into the State Tournament. They've even got a chance to win it. I don't think they will, but that doesn't matter. They're going to be there, and that's enough. Even if Lewiston knocks them out in the first round, that's enough. Because it's something they did together between those chalk lines. They're going to remember that. They're going to remember how that felt."

生まれも育ちもメイン州のスティーヴン・キングは、熱狂的ボストン・レッドソックス・ファンとして知られており、作品の中に時折レッドソックスのグッズを登場させているほど。そんな野球狂キングが、リトル・リーグを舞台に描いたのが本作品である。

"AUTHOR'S NOTE: I am breaking in here, Constant Reader, to make you aware that this is not a story but an essay—almost a diary. It originally appeared in *The New Yorker* in the spring of 1990." と冒頭に注釈があるように、これは小説ではない。1989 年夏、彼の息子オーエンが所属するチーム、バンゴア・ウェストサイドがメイン州第３区予選を勝ち抜き、メイン州リトル・リーグ・チャンピオンになるまでを追った一種のルポルタージュである。1990 年春の『ニューヨーカー』誌に掲載され、後に 1993 年刊行の短編集 *Nightmares & Dreamscapes* に収録された。

メジャーリーグならともかく、リトル・リーグが小説や映画で取り上げられることは滅多にないが —— 年配の方なら、映画『がんばれ！ベアーズ』を覚えておられるかもしれない —— キングは、ハルバースタムが 1949 年のワールド・シリーズを再現したのに匹敵する情熱を傾けて、バンゴア・ウェストサイドの戦いに随伴する。

整備されていないグラウンドで、揃いのユニホームなどなく、入場料の代わりに集める寄付金で用具費と施設管理費をまかないながら、彼らは戦っていく。四球やエラーは日常茶飯事で、勝負の行方は最後の最後まで分からない。そんな中でも、少年たちの野球に賭ける意気込みと情熱は本物で、メジャーリーグ顔負けのドラマが生まれる。選手たちは熱く、試合を見つめるキングも負けじと熱いので、当然このルポに接する読者も熱くなる。

メイン州決勝戦の５日前、キングがチームのコーチに "When this is all over, what are they going to take with them?" 問いかけると、こう答えが返ってくる："They're going to take each other."。

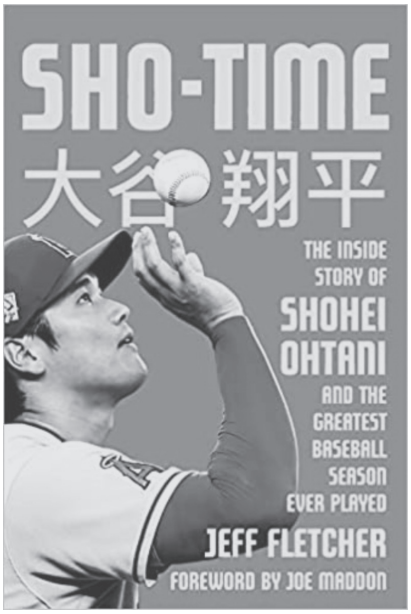
たかが野球、されど野球。

9th Inning

Jeff Fletcher

SHO-TIME The Inside Story of Shohei Ohtani and the Greatest Baseball Season Ever Played (2022)

Diversion Boks ／ 232pp. ／ $27.99 ／ ISBN: 978-1635767971



Early in the experiment, after that first start against the White Sox, Maddon made a comment he would repeat often in 2021. He believed that Ohtani would flourish with fewer restrictions.

"It's all interconnected," Maddon said. "Everything we do is interconnected. He is a very introspective, bright young man who loves to play baseball. Let's stay out of his way. Let him play baseball and see what happens."

What happened was historic.

誰もが実現など不可能だと冷ややかに受け止めていた、投手と打者の「二刀流」。花巻東高校を卒業して日本ハムファイターズに入団した時、その実現可能性を信じていた人は、球団関係者を含め、果たしてどれだけいたことだろう？ところが５年間の日ハム在籍時に、投手としても打者としても球界を代表する選手として大活躍。そして 2018 年、海を渡って MLB でのプレイを始めると…And the rest is history。

著者のジェフ・フレッチャーは、この 10 年間エンゼルスを担当している地元の番記者。大谷選手の幼少期に始まり、花巻東高～日ハム時代～エンゼルスへと至る活躍を、徹底した取材と豊富な資料を駆使して 'history' ＝ his story を辿っていく。大なり小なり野球（大谷選手）に関心がある人なら、ここに書かれていることの多くは先刻御承知だろう。しかし、トミー・ジョン手術とリハビリのことや（Chapter 7 A Discouraging Diagnosis）、ベーブ・ルースと大谷選手の他にも「二刀流」プレイヤーが存在した史実（Chapter 11 The Start of Something Extraordinary）については日本で余り報道されていないので、この辺りは流石 MLB を長年担当している記者ならではの視点と取材力だなと、感心させられる。

2018 年の鮮烈なメジャー・デビューの後、手術とリハビリを経て、2021 年からの復活と大活躍を描く本書後半は本書の白眉であり、読みながら思わず血沸き肉躍り、幾度も読み返して個々のプレイを脳内再現したり、YouTube で動画を検索したくなる。漫画の世界でも " そんなのあり得んやろ！ " とツッコミが入るであろうスーパーヒーローを、現実のものにしてしまった unicorn Ohtani Shohei。

「大谷翔平」と同じ時代を生きている僥倖に改めて真摯に感謝したくなる一冊。